memo
消費者教育
実践事例集

第128回

金融教育で障害者のQOL向上をめざす
－特別支援学校での実践および成人した障害者対象のお金の学びの機会－

安岡 知美 Yasuoka Tomomi 高知大学教育学部附属特別支援学校 教諭
中学部・高等部の家庭科担当。知的障害のある生徒が将来自立できる力をつけるため、食材の買い物から調理までを1人で行う食学習や金融教育に取り組んでいる

知的障害者と金銭

1人1台スマホを持つことが当たり前になり、キャッシュレス化が急速に進んでいる現代において、誰もがお金の扱いについて知識が求められるようになり、学校では金融教育が行われるようになりました。

ところが知的障害特別支援学校では、十分なお金の教育が行われているかというと、まだそうではありません。特別支援学校高等部では卒業後の就労に向けての作業学習がカリキュラムに組み込まれていますが、働くことを学ぶことが中心で、働いて得たお金の使い方については、まだ十分な学びの機会がないのではと感じてきました。

これまでの私の教え子でも、卒業後、仕事は真面目にしているのですが、給料を1日で使い果たす、他人に騙(だま)されて金銭を盗(と)られた、必要なものであっても1人で買い物ができないなど、金銭の使い方に問題のあるケースを何度も見てきました。

障害があっても自分の夢を叶(かな)えて豊かな人生を送ってほしい。金銭管理の難しい人は支援を受けながらであっても自分のお金について知ってほしい。私はそのような思いで日々金融教育に取り組むようになりました。

特別支援学校高等部での実践

日頃、生徒は金銭を使う機会が少なく、金銭感覚が十分に育っていません。そこで、本校の家庭科の授業では、数回分の予算を渡し、自分の食材を自分で買って調理をする学習機会を設けました。

ほかにも金融教育の内容を多く取り入れた授業を展開しています。一例として、ライフプラン学習では、自分の叶えたい夢、それにかかる金額を調べ、いつ叶えたいのか、夢を実現するためにいくらずつ貯金をしていくか、実際にプランを立てる学習をしています。生徒は自分の力でやりたいことを実現できると知り、熱心に学習しています。そして金融教育は学校教育だけのものではありません。実際の生活の場である各家庭と連携して取り組んでいけるよう働きかけを続けています。

金融教育を受けた卒業生の今

金融教育を受けた卒業生は社会人になってからも仕事に生き生きと取り組み、自分の目標に向かって貯金をしていることを報告してくれます。「行きたかった旅行に行けた」「家族のために洗濯機を買った」「自動車学校に行くための資金が貯(た)まった」など、毎日を豊かに過ごしていることを知ると大変喜ばしく、金融教育はまさに生きる力に直結する教育だと感じています。

成人した障害者のための金融教育の機会

高知県安芸(あき)市は人口減少が進み、商店も減り、障害者の余暇の選択肢も豊富とは言い難い状況です。市内の障害者を支援する方々から、障害者の金銭トラブルについて伺うことがあり、買い物やSNS等での消費者トラブルのみならず、障害者本人の給料をすべて支援者が管理しているために、本人はお金を使ったことがまったくない、毎日にやりがいを見いだせていないなどの

現状を知ることができました。実際、対象者にアンケートを取ると、休日の過ごし方は「昼寝」「スマホでSNS・動画視聴」などが上位であり、金銭の扱いの知識、危険に対する意識が十分ではないのに、スマホを中心に余暇を過ごしていることがうかがえます。また、このアンケートで挙げられた「買い物」は家族の買い物につき合っての行動であり、自分で自分の買い物の支払いをする機会すら少ないことが明らかになりました。それだけでなく自分の毎月の給与額を知らない、保護者や支援者に金銭管理をすべて委ねているため、通帳を見たことがない、あるいは通帳の存在すら知らない人が多くいることも分かりました。

そこで2024年度は市の社会福祉協議会の主催で知的障害・発達障害のある人を対象に毎月1回程度、金融講座「だいじなお金のはなし」で講師をしています（写真）。講座では、バーチャルで出かけたと仮定しての金銭やりくりゲーム、人生トラブル対応シミュレーションゲーム、クイズで学ぶキャッシュレス学習（図1）などを行っています。講座は毎回好評で参加者は回を重ねるごとに増えています。受講後の感想でも「お金を大事に使おうと思った」「家に帰ったら通帳を見る」「旅行をしたいから貯金をする」などの感想が寄せられています（図2）。

さらにこれらがきっかけで、親亡き後を考え、障害者本人がより自立した生活を送るために、家庭で取り組んでほしい金銭管理の方法等について、保護者や支援者を対象とする市の福祉担当課主催の講演の機会も設けました。

豊かな明日のために

今後ますますキャッシュレス社会は進んでいくことでしょう。計算の苦手な障害者にとって、カードで買い物ができるようになることは行動範囲の広がりが期待できます。反面、使った金額が分かりにくいことから、障害者が金銭トラブルを抱えてしまうことも予想されます。

だからといって、障害者本人から金銭を遠ざけてしまうのではなく、金銭について知ることで、自分の欲しいものを買う経験や、貯金をすることをとおして、自分の生活に目標ややりがいを持てるようになることをめざしていきたいと考えています。そうすることでQOLは高まり、明日をより豊かに生きる力がついていくことでしょう。

誰かの支援を求めるだけでなく障害者自らが楽しく生きがいを持って暮らしていけるよう、学校でも金融教育を、そして成人した障害者の大切なスキルとして金銭の学びの機会を設けていくことが今後ますます求められると考えます。

写真 「だいじなお金のはなし」講座のようす

図1 キャッシュレス学習で使用したスライド（一部）

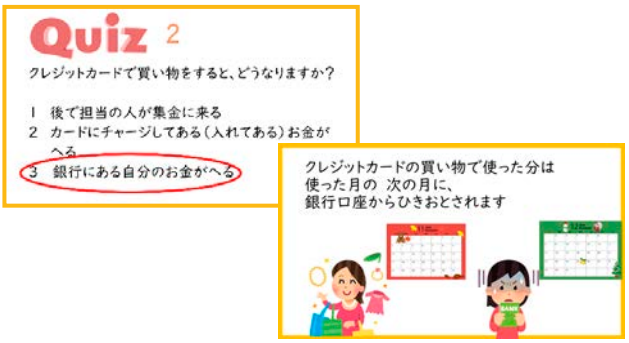
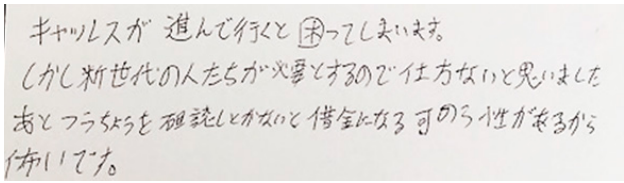
図2 参加者の感想（一部）